

上田秋成小説 の研究

森田喜郎 著



秋成小説の
核心をつく！

和泉書院刊

森田 喜郎（もりた・きろう）

昭和7（1932）年，秋田県に生まれる

法政大学大学院博士課程終了

現在，秋田県立農業短期大学教授

主要著書

上田秋成（紀伊国屋新書，昭和45年1月，
紀伊国屋書店）

校註雨月物語（昭和49年5月，笠間書院）

校註春雨物語（昭和50年9月，笠間書院）

上田秋成の研究（昭和54年1月，笠間書院）

日本近世文学論（昭和62年3月，和泉書院）

現住所 ☎010 秋田市手形字扇田18-6

上田秋成小説の研究

和泉選書62

1991年12月30日 初版第一刷発行©

著 者 森 田 喜 郎

発 行 者 廣 橋 研 三

印 刷 所 亜 細 亜 印 刷

製 本 所 小 幡 製 本

発 行 所 有 限 公 司 和 泉 書 院

〒543 大阪市天王寺区上汐 5-3-8

電話 06-771-1467

振替 大 阪 7-15043

ISBN4-87088-502-6 C1395

上田秋成小説の研究

森田喜郎著

和泉選書

まえがき

さきに刊行した『上田秋成の研究』（昭和54年1月笠間書院）では、秋成のほとんどの作品の文学的意義を探究した。それに続いて、こんどは秋成の主要な小説に焦点をしばって、考えをまとめてみた。中でも、浮世草子（気質物）である『諸道聴耳世間猿（狙）』（一七六六年刊・秋成33歳・数え年）、『世間妾形氣』（一七六七年刊・秋成34歳）、読本である『雨月物語』（一七七六年刊・秋成43歳）、『春雨物語』（一八〇八年成立・秋成75歳）の代表作を主に取りあげ再検討してみた。その結果でた主な見解は、以下のとおりである。①『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』の全二十七篇はその内容から四つに分類できること、②それらが後の『雨月物語』『春雨物語』の基盤になっていること、③『雨月物語』の全九篇も四つに分類

できること、④それらがそれぞれ重なりあいの関係になっていること、⑤『春
 雨物語』の全十篇もまた四つに分類できること、⑥それらもそれぞれ重なりあ
 いの関係になっていること、⑦『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』から『雨月物
 語』『春雨物語』への発展の過程を明らかにしたこと、⑧『雨月物語』から『春
 雨物語』への発展の実態を明確にしたこと、⑨『雨月物語』は謡曲「雨月」の
 影響を受けていること、⑩上田秋成の描いた人間は主に「まこと」と「直き」
 人間であったこと、⑪上田秋成の古典研究は独自のものであったこと等である。
 識者のご指導を仰ぎたい。さらに、このささやかな書が斯界に少しでも寄与す
 ることができるなら、望外の喜びである。

平成三年秋

森 田 喜 郎

目次

まえがき

第一章 上田秋成小説の展開

一 『諸道聴耳世間猿』『世間妾形気』の展開……………11

- (一) 執する氣質のおかしさ (二) 氣質の対照のおかしさ (三) おかしな風俗 (四) 騙りのおかしさ (五) 『諸道聴耳世間猿』『世間妾形気』の構成

二 『雨月物語』の展開……………25

- (一) 「白峯」「貧福論」「仏法僧」の関連 (二) 「浅茅が宿」「菊花の約」の関連 (三) 「吉備津の釜」「蛇性の姪」の関連 (四) 「青頭巾」「夢応の鯉魚」の関連 (五) 『雨月物語』の構成 (六) 『雨月物語』の構成に関する従来の見解

三 『春雨物語』の展開

- (一)「捨石丸」「樊噲」の関連 (二)「血かたびら」「天津処女」「二世の縁」の関連
 (三)「海賊」「目ひとつの神」「歌のはまれ」の関連 (四)「死首の咲顔」「宮木が塚」
 の関連 (五)『春雨物語』の構成 (六)『春雨物語』の構成に關する從來の見解

第二章 上田秋成小説の發展

一 『諸道聽耳世間猿』『世間妾形氣』から『雨月物語』『春雨物語』への發展……………93

- (一)執する氣質の描写から徹する者の描写へ (二)氣質の對照のおかしさの描写から性格や議論の描写の展開へ (三)おかしな風俗描写から自然等の描写の展開へ (四)騙りのおかしさの描写から裏切る者の描写へ (五)謡曲「雨月」との関連—世俗から風雅へ—
 (六)『妾形氣』三一・二・三から「浅茅が宿」へ (七)その他の関連 (八)まとめ

二 『雨月物語』から『春雨物語』への發展……………124

- (一)「白峯」から「血かたびら」へ (二)「仏法僧」から「目ひとつの神」へ (三)「浅茅が宿」から「宮木が塚」へ (四)「青頭巾」から「樊噲」へ (五)まとめ

第三章	上田秋成の描いた人間……………	147
-----	-----------------	-----

- (一)「まこと」の人間 (二)「直き」人間 (三)嘲笑から賛美へ

第四章 上田秋成の古典研究

一	『金砂』における万葉集の研究……………	167
---	---------------------	-----

- (一)上田秋成の『万葉集』の研究 (二)『金砂』の意図と内容 (三)『金砂』における山上憶良論 (四)『金砂』における柿本人麻呂論

二	『源氏物語』『落窪物語』……………	184
---	-------------------	-----

- (一)『ぬば玉の巻』 (二)『雨夜物語たみことば』 (三)秋成校訂『落窪物語』

あとがき

第一章

上田秋成小説の展開

一 『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』の展開

(一) 執する気質のおかしさ

上田秋成が処女作の『諸道聴耳世間猿』（以下『世間猿』と略称・注）とそれに続いて、その翌年に刊行した『世間妾形氣』（以下『妾形氣』と略称）で、意図したものは何であつたろうか。『上田秋成の研究』（昭和54年1月笠間書院）で、その意義や特色等を考えたが、それを受けて、ここでは、上田秋成小説の展開の探究のはじめとして、それらを中心に『世間猿』『妾形氣』がどのような展開になっているかを再検討して、そこでの秋成の意図が何であつたかを究明し、あわせて、その特色についても再考してみたい。

はじめに、『世間猿』『妾形氣』で展開されている執する気質のおかしさについて、『世間

猿』四之卷一の「兄弟は氣のあはぬ他人の始」(以下「兄弟は」と略称)を中心に考えてみたい。

「兄弟は」は風流に執する氣質のおかしさを中心に描いている一篇である。奈良の墨商人の鵜飼屋伊兵衛は、「生得うまれつきの廉直すなまじより迂作うろせつかず、追従ういぎらひにて、身持万事に高情をこのみ」という人だった。そして、風流に生活しているが、「此男のくせにて、何事を稽古しても最初から論がつき過て、無要の事に念を入れて、金銀を積でも、伝授といふ程の事さらへてしまはねば氣が済ず。古今の三鳥三木、源氏物語に三箇がの伝、勢語に七箇の大事と残りなく伝へ得て、宗祇法師の鬚に香をとめられたは、連哥を案じる便りになる事いや。もし左様ならば私が髭ものばして炷しめましやうかとの執心」という執し方だった。それに対して、宗匠が適当に答えたのに、伊兵衛が感心して、「それでよめた事がござります。町家を往来いたして見ますれば、小間物あぶらなどを商ふ店に、髭油と申(す)看板をしるしましたは、宗長の書を出書にてつけました物と初めて心が付きました。わづか小間物を商ふ者すら、かゝる風流をいたすものを、我等が只今までのおこたり、恥かしう存まする」といい、その伝書まで尋ねるほどだった。三十歳が過ぎても独身なので、母が結婚をすすめると、「母には風流を遊ばさぬゆへ御合点がまいらぬ。妻子に足をつながれては、

諸道共に成就いたしがたし。いにしゑの名ある人は、皆家を捨て剃髪し、哥枕修行せられました。既に佐藤則清が西行法師の類あまたある事なれば、私も兼ては哥枕の行脚の望みでござります。人は一代名は末代、虎は死て皮をとゞむと、禽獸すら心なきにあらず。縁辺の事は御免下さるべし」といって聞き入れない。そこで、美人を側においたら、心の移ることもあろうかと、よりすぐった美女に因果を含めて仕えさせてみると、読書に熱中して見向きもしない。ある時、女が脇に寄ると、伊兵衛は「目の玉をひつくりかへして、其まゝ煮へ茶を女が面へざんぶりと打つけ、こいつなめ過た。(中略)手代共此女めう郎めぼいまくれ」と、「抱て寝る所か、生爪はなして山の薯蕷いもほりそうな勢ひ」であった。母はそれを苦にして死に、間もなく家も破産してしまふ。伊兵衛はあちらこちらと流転したあげくに、剃髪して吉野で過す。そこでも「とても沙門の身のうへには、極楽世界八苦の地獄がある事かない事か、此伝授がすましたい」と思うのであった。彼は最後の最後まで風流に執っていたのである。このように、「兄弟は」は伊兵衛がいかに風流に執したかをおかしく描いた一篇である。

「兄弟は」のような執する気質のおかしさを描いているのは、他に『世間猿』では、①

二―二で仏教、②三―二で口上、③四―三で唐好みの遊女、『妾形氣』では①一―三で玉手箱を鼠に食われ老婆になった女が鼠取婆とよばれるまでになる話、②三―二・三で妾に二度の遊女づとめまでさせても失敗する男、③四―二で栄耀好みの妾の各篇で展開されている。このように、執する気質のおかしさを描いているのが『世間猿』『妾形氣』の第一の特色である。これが後の『雨月物語』の徹する者の描写等の物語「浅茅が宿」「菊花の約」「青頭巾」「夢応の鯉魚」等へとさらに発展していくのである。

(二) 気質の対照のおかしさ

次に『世間猿』『妾形氣』で展開されている気質の対照のおかしさについて、『世間猿』二之巻一の「孝行は力ありたけの相撲取」(以下「孝行は」と略称)を中心にして考えてみよう。

「孝行は」は親と子の気質を対照して描いている一篇である。貧乏な相撲取である播州高砂の相生浦之助は「二親に孝行なる事近郷にかくれなく、朝は星をいたゞきて曾根の塩

浜へ雇はれ、麦一升の働き、冬は寒取に生疵のたへるまもなく、どふぞ親達を安楽にやしなひたいと、四十八手の外に身を粉にはたひて身過の工夫」と、親孝行で一生懸命働いている。しかし、その「親父は小博奕打て大酒くらひ、なんぼ有ても堀ぬき世帯、底はかたなく負くらせば、鬼の女房に鬼神とやら、娼衆も同じくなる口にて、針手もきかぬ石臼嬢。三度の朝夕の外に間鍋の菜このみ、陰口がわるい」と近所の茶飲にさへはねのけられても、鎌婆がかゝり子をいぢりたて、小遣錢がたらぬの、博奕の元手がすくないのと、ねすり事のある状」と、両親は子の浦之助とは正反対で、ろくに働きさえしない。その点、親と子を対照して描いている。浦之助が大坂の勧進相撲へでかけるが、食べ物が十分でないため、力が出ないことから、全敗してしまふ。給銀の一両を大事にして、道中、「西国へいぬる傍輩の相撲の着替どもをひとつにして、十二三貫目の歩荷持」をしながら帰ってくる。その大切な銀を手にした父は、「上方へ相撲／＼といふて大そふたてゝのぼったはるか、おきをらふ腕なしめ。此摺み取の世界に大坂の腹はれどもに這つくばふて、目くさり金の一兩やそこら、一夜さのはり代もなひ、不甲斐ない悴を持たゆへ年寄て入米がわるい。病でをる弟めが達者なら、此様には有まい」と、こきおろす。母は母で、「大かた給